

技術士に関して最近思うこと

高知県 建設/総合技術監理部門

右城 猛

(株) 第一コンサルタンツ



日本技術士会と県技術士会

1月24日に高知県技術士会の定例会を開催した。平成25年度はアベノミクスの影響もあって、建設関係の会社は、これまでにないほど多くの仕事に恵まれた。超多忙な時期であったにもかかわらず23名の参加があった。いつもは高知会館を利用しているが、本会の発足当時によく利用していた土佐しっぽく料理の店「葉山」で開催した。

14名の会員で本会を設立したのは昭和61年10月である。既に27年が経過した。当時は、春、秋、冬の年3回、料理店に集まり、杯を交わしながら各自が1分間の近況報告をして親睦を深めていた。「葉山」は今日のように立派な建物ではなかったが、今と変わらず一人5千円の会費で飲み放題であった。参加予定者が欠席すると、レジをしていた店主にお願いして、人数分だけに負けてもらっていた。

今回の定例会は昔の流儀で行った。最初に、簡単に四国本部役員会の議事内容を報告し、続いて参加者全員が1分間の近況報告をした。全員が一言喋るだけで、その後の宴会が盛り上がる。お互いが近況を聞いているので話題に花が咲く。ベテラン技術士の体験談や会社の垣根を越えた先輩技術士からのアドバイスは、若い技術者にとって宝となる。身銭を切って会費を払ってでも参加したいと思う気にさせるだけの魅力がある。

他の県でも状況は同じだと思う。県技術士会は長い間の信頼関係で強い絆を保っている。技術士になってこの会に入会することが多くの技術者の憧れになっているのである。

近年、各地で日本技術士会の県支部が誕生している。岡山県のように県技術士会を解散させた後に県支部を立ち上げるケースもあるが、最近誕生した鹿児島県支部は、県技術士会を残したまま発足させた。県支部に入会する条件は、日本技術士会会員に限定されるが、非会員が多いという問題があったためである。

鹿児島県の場合、県技術士会の会員数は560名であるのに対し、発足した県支部の会員は89名と少ない。統括本部からの補助金も少なく、県支部単独での組織運営は実質的に困難なようである。

日本技術士会の会員拡大が一向に進まない理由として、2万円という年会費が高いという意見を聞くが、本当は別のところにあるように感じる。

日本技術士会では、平成24年4月に公益社団法人へ移行し、それ以来、組織運営におけるガバナンスが強調された。ガバナンスの本来の意味は別として、「統治」「支配」「管理」など統括本部主導のトップ・ダウン的なイメージが強い。

技術者は、一般的に支配されることを好まない。日本技術士会に県技術士会のような自由闊達で愉快的な雰囲気があり、そして知的充足感を味わえる組織であれば、勧誘しなくとも入会者が増えるのではないだろうか。

8歳の少年が一次試験合格

平成25年度の技術士第一次試験の合格者は5,547名、合格率は37.1%であった。この狭き門を小学校3年生の川田獅大(れおと)君(受験時は8歳)が突破し、化学部門で合格し

た。これまでの最年少記録 17 歳を大幅に更新し、大きな話題になった。

1 月 8 日付けの朝日新聞は、「獅大君は化学式を作って遊ぶカードゲームで、元素記号や化学式を楽しみながら、次々と暗記。試験の 2 週間ほど前からは過去問題で対策した。学校の授業を終え、自宅で 1 日 6 時間の勉強に励み、深夜 2 時まで及ぶこともあったという。獅大君は 1 時間かけて自力で問題を解き、その後、父・直司(44)に解説を受けるスタイルで学習。出題傾向を頭にたたき込んだ」と報じた。

東京新聞夕刊にも同様な記事が掲載された。このような記事は、技術士試験を受験しようとしている若い人に大きな刺激を与えるとともに、受験勉強の参考になる。

平成 26 年度の技術士試験のポスターには、いかにも賢そうなイケメンの青年をモデルに使っているが、来年のポスターには、獅大君を起用することを提案する。今年のポスターよりもはるかに親しみを感じる。獅大君のような少年たちがどんどん受験するようになれば、技術士の人気は一気に上がるだろう。

技術者倫理

独立行政法人理化学研究所のユニット・リーダー小保方晴子(30)さんらの研究グループによる新型万能細胞「STAP 細胞」に関する論文が、世界的に権威がある英科学誌 Nature の 2014 年 1 月 30 日号に掲載された。

白衣の代わりに祖母にもらった割烹着を着て実験する若き美人研究者の姿が大々的に報道され、世界各国から注目を集めた。

「昨年春にネイチャーに投稿した際は、過去何百年の生物細胞学の歴史を愚弄していると酷評され、掲載を却下された」「誰も信じてくれなかったことが、何よりも大変だった」「何度もやめようかと思ったけれど、あと 1 日だけ頑張ろうと続けてきて、いつの間にか今日に至った」「STAP 細胞は必ず人の役に立

つ技術だとの信念を貫いて膨大なデータを集め、今回の掲載にこぎつけた」といったマスコミの記事に、多くの国民は感動させられた。

安部総理大臣は、小保方さんの功績を賞賛した上で、「世界で日本が、女性が一番輝いている国にしていくために全力を挙げていきたい」と決意を述べた。

ところが、「論文の一部は、他の論文からコピーしている」「STAP 細胞が出来る裏付けがない」「Nature の論文に掲載した画像が、STAP 細胞とは関係ない論文の画像と酷似している」といった疑念が次々に吹き出し、3 月 14 日には論文の取り下げが発表された。

昨年 11 月には、阪神阪急ホテルズ、帝国ホテル、プリンスホテルなどの一流ホテルや高級旅館三笠などでメニュー偽装が発覚した。

日本人の倫理やモラルは一体どうなってしまったのだろうか。

戦前の日本統治時代に育った台湾人がよく使う言葉に日本精神がある。「嘘をつかない」「不正なお金は受け取らない」「失敗しても他人のせいにならない」「与えられた仕事に最善をつくす」を意味している。日本には日本精神がなくなってしまったのだろうか。

日本技術士会には「技術士倫理綱領」があり、10 項目からなる基本綱領が定められている。第 4 項(真実性の確保)には、「技術士は、報告、説明又は発表を、客観的かつ事実に基づいた情報を用いて行う」。第 5 項(公正かつ誠実な履行)には、「技術士は、公正な分析と判断に基づき、託された業務を誠実に履行する」と明記されている。

日本技術士会では、会報「PE Journal」に技術者倫理シリーズが設けられるなど、技術者倫理教育に力が入れている。

技術士に限っては、偽装や捏造など技術者倫理にもとる行為はあり得ないと信じている。

2014.3.16